

# 子どもが「つながり感」を持てるかかわりを！

本年度前期の本市における不登校(病気・けが, 家庭の事情を除き, 4~10月に15日以上欠席)は, 昨年度同期より, **小学生が15%増, 中学生が2%増**となっています。

本市の不登校出現率は, ここ数年横ばいの状況が続いているものの, 全国平均を大きく上回っており, 冬休みを前に, 日ごろのかかわりをもう一度振り返ってみる必要があります。キーワードは, **子どもを感じる教師との「つながり感」**です。



## 不登校の予防策として

### CHECK!

Q - Uで「学級生活不満足群」に属した子に対し, **どんなアクションを起こしましたか?**

教師サイドのアクションとしては...

その子の日ごろの様子を, 注意深く観察する。  
他の教師に, その子について知っていることや感じていることなどを聞いてみる。  
他の教師に, その子様子を注意して見てくれるように頼み, 気づいたこと知らせてもらう。  
教育相談部会等で話題にし, 複数の先生方でその子について話し合う。  
中学校では, スクールカウンセラーに相談してみる。

担任一人で抱え込むのは禁物。子どもの状態によっては, 学年内の対応では不十分なことも。学校全体を見渡して, リーダーシップを発揮する教師の存在が欠かせません。

児童指導主任 / 生徒指導主事, 教育相談係 / S C M, 特別支援教育コーディネーター等

子どもに対するアクションとしては...

その子を個人的に呼び, あるいは教師の方から機を見てそっと近づき, アンケートの結果について心配しているということ, そんな思いを抱いていることに, 先生はもっと早く気づいてあげべきだったこと, 楽しい学校生活を送れるよう, 先生にできることは協力し, 先生も努力することを伝える。

ここで聞いたことは, 断りなくだれかに話すことはないことを約束した上で, 普段感じていることを, 急かさずゆっくり聴いてみる。

ただし, 特に語らない場合は, それ以上無理強いはしないようにする。

子どもは, アンケート(Q - U)の結果を先生はどう思っているのか, 気にしているはず。とくに, ネガティブな回答が多かった子ほど, そうした思いを抱いているものです。

各項目への回答は, 教師への「心のメッセージ」でもあるのです。

子どもは, 教師の何らかのアクションを待っています。ですから,

「先生は知らんぷり」 「先生は私に関心がない」 「私はいてもいなくても関係ない」

こんな悲しい連鎖が起こらないよう, 子どもに分かるように思いを伝えることが大切なのです。

Q - U実施からはだいぶ時間が経ちましたが, まだまだチャンスはあります。

子どもへのアクションは起こしていなくても, 今までずっとその子が気になっていたはず。その思いを, 子どもに素直に伝えればよいのです。

きっと子どもは安心し, 教師との「つながり感」を実感することでしょう。



CHECK!

3日間連続して休んだ子に対しては、保護者に様子をきいていますか？

感染症などによる欠席を除けば、通常、頭痛や腹痛を理由に、3日間も連続して学校を休むことは、よほどのことがない限り、そうは起こらないものと見るべきです。必ず保護者と連絡を取り、家庭での様子をきいて確認します。

欠席連絡が手紙（欠席届）や、電話連絡の伝言であると、保護者と直接話すことができませんので、あらためて教師の側から連絡を取ることが大切です。

もちろん、子ども本人とも話したいものです。それができない場合は、保護者を通じて教師からのメッセージを伝えてもらうようにします。

家庭の状況が許せば、この時点で家庭訪問がなされると、子どもと親は安心できます。

不登校の子への対応として

教育センターでは、本年度、相談機関等につながっていない不登校の小学生に関する、臨床心理士による巡回相談を行い、希望のあった11の小中学校で、主に教師を対象とした相談を実施しました。

現在、不登校状態にある子に対しては、その子についての見立てと、その子を取り巻く現実の様々な状況下で教師として可能な対応を継続していくことが大切です。その際、学級担任ひとり判断するのではなく、他の先生方との協議や、専門家への相談をとおして、対応の方針を確認しておくことが、教師自身にとっても安心感につながります。小学生の場合、その子がやがて進学する中学校のスクールカウンセラーに相談する方法もあります。その場合は、学校間での事前の連絡調整が必要です。教育センターでも、予約制で先生方からの相談に応じています。

CHECK!

子ども本人、保護者との連絡はきちんとされていますか？

毎日登校している子の中に手のかかる子がいると、教師のエネルギーは、どうしてもその子にばかり向いてしまい、不登校の子への対応が後手に回ってしまうことが起こりがちになります。電話連絡や家庭訪問で、教師が期待したほどの反応がないと、つい億劫になってしまうこともあるのではないのでしょうか。しかし、どんな場合であっても、教師の心のエネルギーが、自分に（わが子に）向かっていることが感じられるようなかわりが何よりも大事です。

他の保護者から聞いて、「保護者会、え？あったの？」などということのないように！

CHECK!

子どもとの関係づくり、関係強化に努めていますか？

不登校の子への支援の第一歩は、「登校刺激を与えるかどうか」ではなく、教師との個人的な人間関係の絆を着実に築いていくことです。ときには教師の鎧を脱いで、お母さん・お父さん、お姉さん・お兄さんのように、その子の興味関心や遊びの世界に寄り添いながら、その子にとって安心して心を許せる存在になることです。会えない子には、手紙やメールが効果的。たとえ返事が来なくても、ほとんどの子は大事にとっておくものなのです。

メールは、できるだけ学校のアドレスを用い、エスカレートしないようルールを設けましょう！

CHECK!

市の適応支援教室、NPO・民間の支援施設との連携を図っていますか？

学校外の教育施設に通っている子については、在籍校の教師が、その施設の担当者とのパイプをしっかり持ち、相互に協力して支援することが大切です。「預けっ放し」にならないよう、電話連絡はもちろん、必ずその施設に足を運び、担当者から子どもの様子をきいたり、活動の足跡を見せてもらったりして、それを評価に生かすようにします。